

目的：国際婦人年(1975年)以降のフェミニズム運動の高まりは、家政学に少なからず影響を与えている。歴史的にみれば、わが国におけるフェミニズム運動の高揚は今世紀の初頭にもみられた。それは「婦人問題」と呼ばれ、婦人参政権運動や女子高等教育要求運動、良妻賢母思想などに影響を与えたとされる。しかし、それらに密接に係わる戦前家政学研究と「婦人問題」の関係については、検討の余地が残されている。本研究では、戦前期の代表的家政学者・井上秀子(日本女子大学校第四代校長)の思想に焦点を絞り、戦前家政学研究と「婦人問題」の関連について考察することを目的としている。

方法：井上秀子の代表的著作及び日本女子大学校の同窓会組織・桜楓会機関誌「家庭週報」を主な資料とし、「婦人問題」に関する記述を抽出、分析した。

結果：日本女子大学校では、「婦人問題」に深い関心を寄せていた同校第二代校長麻生正蔵の指導の下に、講演会や研究会が行われ、特に1927年の婦人問題研究会では、井上秀子を中心に、家庭生活と職業の両立の問題が討論された。井上は、この問題の解決策として、育児期間中は主婦業に専念し、子どもが成長した後には職業に就くのが理想的と述べ、今日のいわゆる「M字型就労」を提示し、女性の意識変革(両立させるという強い自覚を持つこと)や家事の合理化などを提起した。また、井上は『家庭管理法』(1928年)においても家庭と職業の両立という問題を取り上げている。このように、井上の家政学研究では、「婦人問題」の影響は、家庭と職業の両立という問題に少なからず波及していったといえる。